漁村の正月行事

大分県臼杵市大字諏訪字津留
加藤泰信

一、正月の支度

正月の名称　正月・盆などを総称してセッキといっている。正月祝はショウガツといわれる。大正月、小正月という名称は使用されていない。

十二月一日・八日・十三日　一日・八日・十三日だからといって特にきまった正月の支度をすることはなかった。

ススハライ　ススハライは特は日を定めてするようなことはなかった。するところとしないところがあり、家によってまちまちであった。

正月用の薪　ムラ（津留部落）には山林、原野が全然なかったので薪は全部買入れた。正月用の薪をショウガツギとよんだ。昔は十二月二十日ごろから準備したが、はやい家は夏のころからモヤイで、四、五軒が一緒になって注文し、十月ごろ買って枯らしておいた。毎年、昔からの顔なじみの者が注文とりに来た。薪の運搬は売方が行ない、馬車でムラまで運びこんだ。遠い所から買った場合はその近くの海岸に運んでもらいムラの船に積んで帰ることもあった。船を何艘も持っている家は薪を沢山使うので、一軒で二、三百貫、大体一年間使用する量を注文した。近隣のムラから毎年きまった人を雇って薪割をしてもらうが、薪割に一週間から十日くらいかかった。薪にする木はカシ・クヌギ・ナラなどで、ウワウラ（臼杵市上浦）、ノツ（大野郡野津町）、イノムラ（臼杵市井村）の奥、シモキタ（臼杵市下北）、遠い所では国東などからとりよせた。現在はほとんど使わず、餅搗用の薪しか買わない。

餅つき　何日からつくというきまりはなかったが、早い家は二十日ごろからついた、一般に二十四・五から二十八日までの間についた。仕事の都合でヌビ（延べ）があれば、二十九日についた。クモチはつかぬといって九の日をさけるようなことはしなかった。ヒをえらぶと

かよけるといって午の日は餅つきをさけた。火があぶないと考えられた。

男はリョウに出たり航海したりするのでつき手が少なく、ムラの家の半数以上は臼杵の町からやってくる餅つきの者に三軒から五軒がクミになって賃づきしてもらった。餅つきの者はセイリョ（蒸籠）などの道具を持参した。ひと臼は二升五合から三升である。

最初の臼で小餅をとったかオカガミをとったかはっきりしない。フナダマサマに供えるオカガミは船長が扱い、他の者にはさわらせなかった。小餅は女達が作った。家に船が何艘もある場合は古い船の方から順番にオカガミをとった。普通の餅のほか、きな粉餅などにして食べたが、なま餅をちぎって酢につけて食べる酢餅にはしなかった。カキモチ・アラレ用の餅は半年間食べるだけの量をついた、特にアラレには米を選んだ。二月十五日のゴネハン（御涅槃）の時にはアラレを煎って黒砂糖をまぶして食べる。これを目クソ・鼻クソといっている。ゴネハンの日にはトショリバーサン達がアミダサンに集まって火をたきオコモリ（御籠）する。オシャカサンのお通夜といっている。猿や象の絵を掛け、「若くとも末をはるかと思うなよ、無常の風は時をきらわん……」といいお経をあげる。

ついた餅の半分くらいは水餅にした。水餅を供えることはなかった。

花餅　餅花という。餅を小さく作って柳の枝か笹につける。さらに鯛・鶴・羽子板・子供の着物・テマル（手毬）・さいころ・将棋のこま・エビス様・ダイコク様・大判・小判など紙で作ったエンギの物を結びつける。モチバナは床の間の柱の横に挿す。昭和十年ごろまでは盛んに作っていたが、今は作らない。かたづけたあとは海に流した。長く飾る家は翌年新しいモチバナを作るまで挿しておいた。

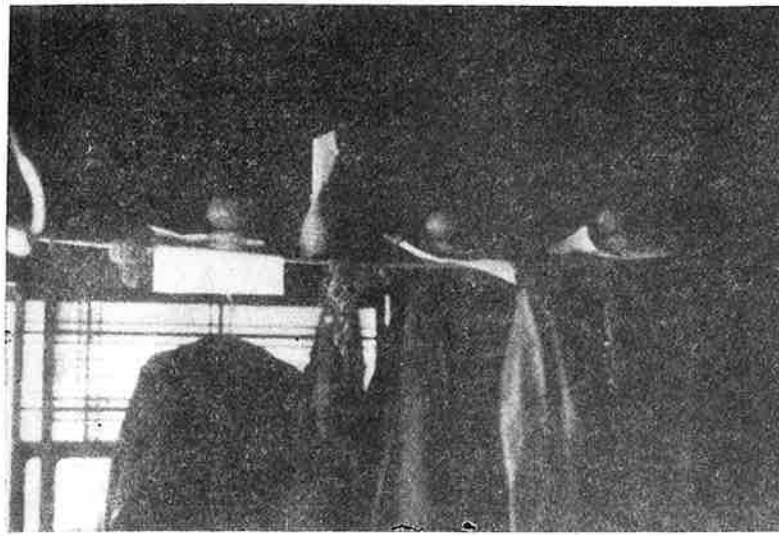
〔餅米〕　ムラには田畑がないので米穀は他所から入手した。近くの井村、末広や野津あたりからも手に入れたが、遠くまでアキナイに出た者が持って帰った穀物を買った。

ムラはアキナイが盛んで女はハンボという直径二尺くらいのタライ様の桶を頭上にのせ、カスリかシマの木綿着物にタスキがけの服装で歩き、海産物と農産物を交換した。木綿の手ヌグイ二十枚を四ツに折り、頭にカブセてその上にワラのシンに布をまいた丸い輪のスケモノを二つのせ、ハンボをすえた。七・八貫目くらいの荷物を頭上に置き手をはなして運搬した。近隣の場合は二人くらいで、鮮魚を持参したが、遠方にはシオモン（塩魚）やホシモン（いりこなどの干物）或は海藻類（ヒジキ・ワカメかアオノリ・トロロ）を商品とした。昭和初期迄は一匹いくらという売り方をしていた。ヒジキ・ワカメは保戸島や佐賀関から売りに来たものを仕入れ、アオグサ（アオノリ）はムラの海岸で採取したものを売った。

アキナイの範囲は広く、近くは臼杵周辺、井村、末広、野津からさらに大野郡三重町、竹田へ数日かけて出かけた。久住より奥の方へ行く場合はクミになって馬車で商品を送り、現地でハンボの女が売り歩いた。遠くは熊本、宮崎あたりまで足をのばした。県外に行く時は一か月も二か月も売り上げるまで帰らなかった。

このアキナイの時海産物を麦や米、豆類と交換して持帰った。餅米もこうして手に入れた。穀物は二斗入る大きな木綿の三角袋に入れた。馬車で商売に行く場合二十枚程用意して出かけた。

現在はハンボを使っていないが、熊本あたりに行商に出る人が数人



トシコシダナ

残っている。

門松　トシノヨの日に家のタイショウ（主人）が松竹梅で門松を作り、オモナ戸口（玄関）に必ずたてた。松にはコブ（昆布）を結びつけた。門松の前には三段のオカガミをオシキゼン（折敷膳）にのせて正月三日間供えた。門松用の松には雄松を使った。ツルムラには山がないので、松は十二月二十五日ごろから二十九日ごろまでに近隣のムラの共有地から入手した。

正月棚　トシコシダナとよぶ。座敷など広い部屋に明き方に向けて天井から二尺くらいのところに一間板を吊りげる。トシコシダナにはトシコシサマを祭る。トシコシダナの飾りつけは大晦日に家の男のタイショウが行なう。トシコシサマには二段のオカガミを三基供える。白紙・ウナジロ（うらじろ）の上にオカガミをおき、ダイダイをのせる。大晦日の夜には六寸角の白膳（オシキゼン）を三個あげる。その他、オミキやマシオ（塩）を供える。元日には日の出を見ないうちにまず砂糖を入れないゼンザイを供える。そのあと正月三が日の間にオーワン料理やゴボウ・ニンジン・大根などの正月の煮物を次々に供えていく。供物は三日間あげたままでとりかえない。供物は四日にさげて一緒に雑炊にし、家族全員で食べる。オカガミは十五日まで供えておく。トシコシダナの供物の上げ下げは家のタイショウが行なった。

トシカザリ　正月の飾りものは家のタイショウが大晦日の明かるいうちに飾ってしまう。満潮の時に行なうが、この時ショウガツヒシャク（新しい竹製のひしゃく）で手さげ桶に海水を汲んで帰り、杉の葉か笹でトシコシダナや神棚、仏壇など神聖な場所にふりかけ清める。船の場合は笹や杉の葉がないので、馬ふん紙でオモテ（へさき）と中

心になる場所（フナダマサマのある所）のアト・サキにかける。キカイ船のキカイのアト・サキにもふりかける。

オカガミはトシコシダナには二段のものを二基、神棚（ヤガミサマ・エビスサマ・ダイコクサマ等を祭ってある）、仏壇、床の間（福寿の神を祭る。ホテイサマなど）には二段のオカガミを二基、ホカ（外）にあるスイジンサマ・コウジンサマには二段のものを一基、いずれも白紙をしき、ウナジロをおいた上にオカガミをのせ、ダイダイをつけて供えた。これらの場所にはオシキゼンをあげた。

〔注連縄〕　オジメとよぶ。大晦日に家ノタイショウ（いない場合は親類の男）が張った。オジメは七本・五本・三本のワラでシリボ（尻尾）を五寸ほど出して左ナワにない、これに白紙を切って三トコロに下げた。この紙をオジメゴヘイという。オジメはすべての戸口に張った。

フカの口を入口に懸けておく家もあった。そうすると悪霊が入ってこないといわれた。フカの口はナカツラムラ（臼杵市大字諏訪字中津浦）にフカナワリョウをする家が二十軒ほどあったのでそこから取りよせた。今はほとんど懸けていない。

正月の飾り物は食べられるものをのぞいて正月七日から十五日までの間に、干潮の時海に流す。胸のうちで「サイワイニ、コンネンモヨロシクダイリョウ（大漁）ノアルヨウニ」などと各人思い思いの願の文句を唱えた。

船松　リョウブネ（ウタセ・打瀬網漁船）のマストの前面、高さ五・六尺の位置に松の木をくくりつけ、長さ二尺五寸ないし三尺のオジメをまきつける。船の松も雄松を使う。松は門松と同じように近隣のムラの山から入手し、大晦日にワケーモンが飾りつける。

フナダマサマ（フナバリを一辺四寸ほどの長さで三角形に切りこみ、その中へ銅銭十二文と紙の人形を入れた。女の毛髪などは入れなかった。納めたあと木のふたをはめ込む時、最初船長がたたきつぎに棟梁がはめ込んだ。）には大晦日ワケーシが箱を利用して台をこしらえ、二段のオカガミをフタカサネ供える。ダイダイをのせるところには餅がやわらかい時、上からおさえてクボイレ（くぼみを入れる）したり、釘を立ててダイダイが落ちないようにしておいた。ダイダイは「センゾダイダイツトーテイクヨーニ」という意味にも考えられたので必ず供えた。

船名を記した幟や小旗で満船飾した。フネの幟は幅一尺五寸、高さ六尺の縦に長いもので、シュモクをつけトモの穴に長い竿を立てて取りつけた。フネの飾りは大晦日ワケーシが行なった。

船松は正月七日以後海に流して片づけた。その時は各人が思い思いの願いを胸の中で唱えたが、定まった形式はなかった。フネのオカガミは正月三日をすぎればゼンザイに入れたり焼いたりして食べる。

キカイセン（機械船＝機帆船）では船長室におさめ込まれたフナダマサマとキカイに赤白赤の三段のオカガミを供える。フナダマサマにはメオト鯛も供える。船名を染めぬいた旗や小旗で満船飾する。

言い伝えによると津留部落は平家の子孫である漁師が三人現在の地にやって来て以後ムラが栄えるようになったといわれ、元来漁業がこのムラの生業であった。明治から大正期にかけてリョウブネ（ウタセ＝帆柱二本、長さ七ひろ）を約六十艘持ち、高島・保戸島・無垢島沖一帯の海域を中心に夏は二ハイ一組でハンサコアミ漁業、冬は打瀬網

漁業でタイ・カナガシラ・ハエ・カレイ・エイ・エソ・オコゼなどをとった。一定の漁区を持たなかったので、五円とか十円とか入漁料を払って時期を定めて漁をした。昭和に入ってから漁区の取締りがきびしくなり、漁師が船乗りに転向したり、他の職業についたりして減少し、漁業は衰退した。現在海に出るウタセは二艘しかなく、それもイシガイ採取に従事している。漁業はかつてツルムラが漁法を教えたといわれるトナリムラの大浜が盛んである。大浜は山と田畑を持つ半農半漁の部落である。

明治十年代、サイゴウ戦争(西南戦争)のころから運漕業が起った。明治三十年ごろは五ハイくらいだったが大正期には約三十パイ、昭和初期には四十パイ余となり発動機をつけるようになった。船乗りは佐伯・一尺屋・下ノ江などから雇った。最盛期は昭和十五年ごろで約九十パイあり、大きな機帆船は三〇〇から四〇〇屯積みだった。太平洋戦争で徴発買上げられて減少し、現在は鋼船を持つ者もいるが(五〇〇～一〇〇〇屯級)、十パイくらいで北九州や阪神方面の船会社に所属している。

貨物運漕の機帆船の他にアキナイの船もあった。朝鮮からシオイオ(塩魚)を運んだり、北海道からサケ(鮭)を仕入れたり、コブ・干魚などを仕入れて大分・四国・山口・宮崎などに売った。

歳暮□盆・正月は一年のギリ(キリ・折目)であるからお寺・お宮・世話になった家などには必ず時季の品物を贈った。オセボは暮の二十九日までに届けた。ヨソのムラの家へあらたまって届ける時は男の主人が出かけるが、部落の中では女や子供が持って行き、男は滅多に動かない。

嫁の方の両親には、聟が父に酒一升、母には下駄や衣類を贈り、別居している場合は、聟の両親にも同じように贈った。それに対し嫁の里は正月二日に若夫婦を招いて御馳走する。この時はテブラで品物は持参しない。年始に行くといっている。嫁の里が嫁ぎ先の家族を招くこともある。この場合は招かれたあと、日取りは決まっていないが、都合のよい時に嫁ぎ先の方が嫁の里の人々を招く。やはり年始といったようだ。正月の馳走のほか新たに酢物やつくり物をする。

ワケーシュは各人年末は二十九日まで、盆は十三日までにヤドの家へオセボを持っていった。品物は定まってなく、子供のいる家ならば羽子板とかテマル(手毬)とか或は家の人にタバコとか何でもよかった。

不幸のあった家の儀式　年内に不幸のあった家では正月前に臼杵の町の祇園様からカンヌシサンをよび、大祈禱をやってもらう。年末ムラの者がその年不幸のあった家に特に年末だからといっておくやみに行くことはなかった。近い親族が行く程度だった。

正月用の着物　オショウガツギといっている。今は洋服を着用するが、昔は袴をはき紋付を着た。シイル時とそうでない年があるが、家族のうち誰かは新しいものを作った。ナカギは新しいものを準備した。正月用の帯をショウガツオビといった。ムラはリョウや運漕業、アキナイで忙しいので織物は作らなかった。一か月前から大晦日までの間に金が入った時臼杵の町で購入した。隣村の大浜ではカスリを織っており、大泊ではシマの木綿を織っていたのでそれらのムラからも買った。

大晦日　元日の日は何もしないので大晦日に仕事の残りや正月の準

備を仕上げておく。正月の飾りは明かるいうちにやっておく。

道具は日頃積重ねて置いてあるようなものでもきちんと片づけて並べなおす。しかしオジメは張らない。

年の夜の夕食　トシノヨの夕飯はトシコシメシという。トシコシメシは普通は白飯であるが、アズキメシ(赤飯)にする時もある。家族全員がそろってから家の中心になる人が茶腕を持ち、それを合図に皆が食べ始める。

〔オーワン〕　トシノヨの夕食には必ずオーワン料理をする。トーフ油揚・ジョウザカナ（エソ・イシウオ・ハンなど）・細く切った大根ゴボウ・シータケなど（肉を入れることもある）を材料にして醤油で煮る。オーワン料理は正月にも作るが、この場合は各家思い思いの日に料理する。

トシコシダナや神棚など神聖な場所にはオシキゼンを供える。六寸角のシラキ（白木）で、トシコシサマ、フナダマサマ、キカイ（機械）には真新しいものを使う。古いオシキゼンも三年使用したら新しいものと取替える。夜食にウドン、ソバを食べることもあるが、遅ソバという意味で特に食べることはなかった。

トシノヨに飲む酒をトシザケといっている。

年まわりの悪い人（十九歳、二十一歳、二十五歳、三十三歳、四十二歳…）はトシノヨにボラを供えてから食べる。ボラは元気がよく、水の上にはねあがるところからこれを食べることによって歳を一つとりこすと考えられた。

若水汲み　ハツミズという。トシノヨ十二時までにヨメが汲む。ヨメのいない家は男のタイショウが汲み込む。男のタイショウ(父親)がいないとか歳をとりすぎている場合は、元気のよい者がタゴで二荷（カ）入るハンド（瓶）に一杯汲む。ハツミズを飲んでおけば病気をしないといわれた。ハツミズは正月の期間中使った。

厄除け　月末の厄除けは特にしていなかったようだ。依頼して九六位山の三光院から祈籌師に来てもらうことはあった。（四十年くらい前まで）その時は特別なので五円くらい包んだ。

四・五十年前までは大晦日の夜除夜の鐘が鳴ってから神様にゼンザイを供えたので、元日の午前一時から三時ごろまでは眠らなかった。

〔トシマイリ〕　トシノヨノオツーヤ（御通夜）ともいって氏神様（天満宮）にトショリ、ワケーシュ男女、子供達が集まり、オコモリをする。夕食後氏神様でオキョウ（経）をあげたあと、持って来た酒を飲んで太鼓をたたき、歌ったり踊ったりした。ワケーシュは元日の朝まで残ってオコモリをした。

二、大正月の行事

正月に迎える神　正月にお迎えする神をトシコシサマ（トシコシオーカミ）という。トシコシサマはトシコシダナに祭る。トシコシサマがどこからやって来るとかどこにお帰りになるとかは考えていない。

元　日

食物　早朝神に供えたオミキを下げていただく。これをハツザケという。

正月の食物はコンブ・コンニャク・大根・ゴボウ・ニンジン・サトイモ・シイタケ・ネブカ・トーフ・餅・サカナ（鯛・その他）などの材料で作る。

〔雑煮〕　餅・ゴボウ・ニンジン・ダイコン・ネブカなどを入れて作る。

〔ゼンザイ〕　必ず作る。以前は雑煮よりもゼンザイの方に重きをおいて盛んにこしらえていた。神棚にも供える。正月三日間は毎日食べられるよう準備した。

〔粥〕　塩気も入れず味付けもしない粥を作り、朝トシコシダナと神棚に供える。カイノハシラといっている。えんぎがよいので供えたあと下げて食べる。

元日のほか三日、七日、十一日、十五日に作る。七日、十一日、十五日はトシコシダナだけに供える。

正月三日は早起きをし、朝六時ごろから食事をした。

神詣　元日の朝、七、八時ごろムラの氏神様に参る。羽織、袴で威儀を正す。トシノヨにオコモりをして朝までいた者も朝食後出なおして参詣する。

寺参り、お墓参りはしない。正月は寺には顔ムケしない。

門付　以前はシシ舞、サルマワシ、オカルコブシ(ダルマ)売りがきた。(どこからやって来たか不明)シシ舞は一人で緑色に白の水玉模様の着物と膝から下をしぼったズボンのようなものをはいて来た。サルマワシも似たような格好をしていたが、オカルコブシ売りは平服だった。「オメデトウ、今年も福の神が……」といっていたようだ。オカルコブシは病人が起き上がるといって必ず買った。エベスサマも来た。エベスサマの帽子をかぶり、袴を着て「今年ハアナタガハズンデモーケサセテ下サイ」といっていた。オサイセンをあげ、鈴を振って踊ってもらったが、今は全然やって来ない。その他、キツネ、ウマ(狐や馬の衣裳をつけた人)もやって来た。

祈禱　大正頃までは元日から三日のうちに九六位山(現在大分市坂ノ市地区の丹生川上流にある。標高四百五十一・七米)の三光院(観音様)から祈禱師がやって来た。家族の名前を書き生年月日を記したお札を持って来て一年の運を拝み込んでくれた。家族一人で十銭くらいのお礼をした。(大正の頃)

お札はハガキよりやや大きい目の祝儀袋の形をしたもので部屋の高い所に家族のものを並べて貼った。前年のものははがし、海に流した。祈禱師はヒョリ下駄(高下駄のやや低いもの)をはいて平服で歩いて来た。

伊勢神宮のお札も来たがこれは二十五・六日の氏神様の祭典の時、氏神様のお札と一緒に宮司が配った。

物貰い　どこからやって来たかわからないが、子供連れの物貰いが「餅ヲ一ツ食ベサセテ下サイ」といって来ていた。

初夢　初夢は元日のバン(元日の夜から二日の朝にかけて)みるものといわれている。セッチン(厠)やナスビ(茄子)などの夢がよく、人が多く集まっている情景とか常日帰らない人が帰ってくる夢はよくないとされた。余りにもよすぎる夢、悪い夢は逆に判断した。よい夢を見るまじないは別にないが、よい夢をみるようにと心で思って眠った。

航海中の船の正月　機帆船は家族クルミ乗っている場合が多い。元日の朝、日の出のころ十分くらい機械を止めて正月祝をする。フナダマサマに柏手を打って参る。「今年モイサミスンデヨロシクオ願イシマス」と唱えて拝んだ。日の出、キカイにも参った。午前中は船窓を

あけておいた。

その他　元日は昼迄戸を閉めておく。「キョウハ、ウチニヨコーチョクレ」といって福の神が家にとどまっていることを願う。

この日は一日中あまり動かない。昼迄はじっとしている。部屋を掃除することもゴミを捨てることもしない。

年の始めだから家族の者にもやわらかにあたり、小言をいわない。子供が泣く時でも「泣クノヲ泣カセンヨーニシテ」気持をやわらげ、機嫌をとる。今日はおとなしくしなさい。福の神を入れなさいといってじっとさせておく。

毎月、旧暦の一日、十五日はシロートシュのトショリバーサンたちがアミダサマと天満宮で、太鼓をたたいてお経をあげ、　御祈禱をする。

正月二日

年始廻り　元日は家の中でじっとしているので二日から三日にかけて年始廻りをする。

年始廻りはヨソのムラにいる世話になった人の家などに挨拶に行きムラの中ではセツカク（わざわざ）家を訪問しない。外で出会った時に新年の挨拶をする。

この日、若夫婦は嫁の家へ招かれ、そろって挨拶に出かける。これを特にネンシといっている。「アケマシテオメデトウ、今年モシアワセニ」といった。親の方も「今年モヨーモーケチョクレ、今年ハ気ヲツケテシンボーセンナラン」と挨拶し、ごちそうする。

ハツブロ　元日には風呂に入らない。二日の午前中に風呂をわかして入った。これをハツブロといっている。

正月三日　この日まで仕事を休む。航海中のキカイ船は例外で仕事があれば正月でも仕事をする。

ワケーシュはムラのヤド（宿）に遊びに行って話に花を咲かせた。三日は総会があり、この時オヤカタ（青年幹部）がムラのキマリ、方針についての話をした。ウワサ（噂）の悪い者（ヨソの者と交際しているとか）は証拠人がはっきりすれば、男女を問わず裸にして頭から水をかけて叩いたり踏んだりした。現在はしない。ワケーシュはかぞえ年十七歳以上二十五歳までの男女で独身の者で構成された。結婚すれば二十五歳にならずとも自然に脱退した。

昔は原則として部落内結婚（ツルムラの者同志で結婚した）であったので部落外の娘を嫁にしたとか、他のムラに嫁に行った場合は非常に悪く言われた。里帰りした時にワケーシュが寄ってたかって男をフンドシ一つにして水をかけ、踏んだり叩いたり、ハラケリをした。親は家の中にとじこもったまま外出することも出来ず文句も言えなかった。

ワケーシュは男女とも大、中、小のグループに色分けされていた。元気のよい者とか性格とかでそれぞれのグループが出来ていて、縁づく場合も自然と大は大同志で婚姻することが多かった。ヤドも大のヤド、中のヤド、小のヤドと本拠が決まっていたが、普通はどこのヤドにも遊びに行った。

（正月の遊び）　子供は羽根つき、コマ廻し、凧あげをした。

昔は臼杵の町へ行ってコマを作ってもらった。コマ廻しには出来るだけ長い時間廻わす遊びのほかウチワリコをやった。これは自分のコマを相手のコマにぶっつけて打ち割る遊びで割った方は相手からコマを取得した。ウチワリコのコマには五寸釘のような心棒を鍛冶屋で作

ってもらってつけた。コマを廻わす時には「ヤッケッケーノケーナケナ」といって気合を入れた。今はヒラゴマで遊んでいる。

凧あげ　ウチアワセをやって相手の凧糸を切ることが盛んだった。糸は五十ピロの長さで、それに竹の台を仕込み、小さな刃物を取りつけて相手の凧糸にからませ糸を切った。竹の台は糸を引くたびに上昇するように仕組んだ。

大人は羽根つき、ハナフリ（花札）、カルタとりを楽しんだ。ワケーシュの羽根つきは特に盛んだった。年頃の男女がさそい合って数人から十人くらい集まってヒーヤフーといって行なった。男に好きな女がいる場合は、彼の友人が気をきかせて相手を誘って来て仲間に入れておく。羽根は女が持参することになっているので始まる前かつき始めた頃、友人が指で彼に合図して彼女の羽根を確認させる。そこで彼は目ざす羽根が自分の所へ来た時、それを手に持って適当な場所へ逃げる。彼女は自分の羽根を持った男のあとを追って行き、二人で楽しく語りあうということをした。女に気持がない場合は男のあとにはついて行かなかった。明治、大正中期頃までは原則として村内結婚をしたのでこういう羽根つきが盛んだった。

結婚式の時はムコが花ヨメの家まで走ってヨメを迎えに行く。走りシューゲンといってまず明き方に向って出発し、あらかじめワケーシュによって定められた道を通ってヨメの家へ行く。道の途中ではワケーシュが待伏せしており、スミを塗ったり、ゴミや墨の入った泥水をかける。帰りは付人を入れて四人になるが、その時もスミを塗られる。ヨメの着物がヨゴレタほどよいといわれた。ムコの家にはゴミやボロが投げこまれる。これが多いほど運が開け、金持になるといわれた。

現在は村内結婚の原則が完全に崩れ、他地域と自由に婚姻している

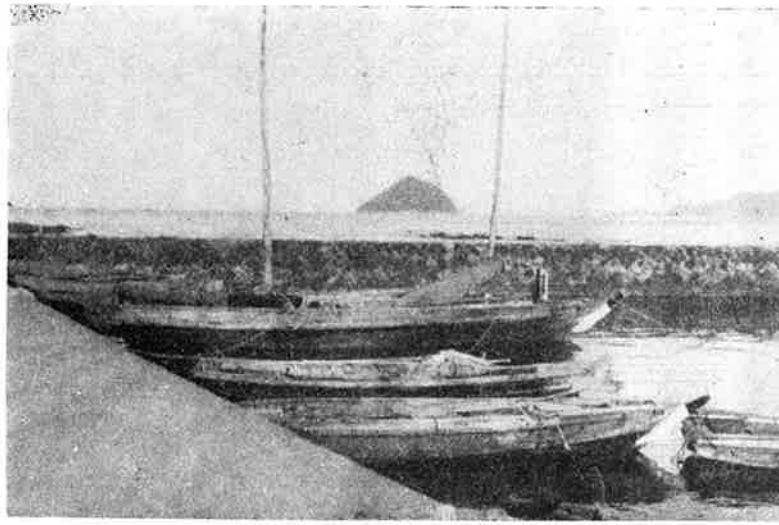
正月四日　この日から仕事を始める。

仕事始め　フナハジメ・ハツリョウといっている。漁に出る出ないに関係なくハツリョウという。主になる人がアミとナワとトックリ（徳利）を持ってウタセ舟へ行く。ボクトウ（棒）でフナバリなど音のしやすい所を一つ叩いてからフナダマサマにオミキを上げる。その時海のスイジンサマにもチョコ（猪口）一杯あげる（海にオミキを落としこむ）。フナダマサマに柏手をたたき、「今年ハアヤマチノセンヨーニ、ダイリョウサシテオクレ」などと思い思いのお願をする。そのあともう一度フナバリをボクトウで叩き、海のスイジンサマに酒を供えフナダマサマのオミキを下げていただく。フナダマサマ・ウミノスイジンサマと一緒に網にもオミキを上げる。網には浮き物が三つあるのでそのまん中に供える。

この儀式が済んでから漁に出かける。この時に舟を三度廻わすことはしなかった。キカイ船が出港する時は三回廻わすことがあった。その場合は左廻わりだった。舟を左廻わり三回廻わすことは昔はなかったようだ。キカイ船を廻わすことがあるようだがどこからこの形式が入って来たかわからない。

四日はオカガミを残してトシコダナの供物を下げ、全部一緒にして雑炊にする。これを食べるとゴリヤクがあるという。

正月七日　ナヌカショウガツという。雑煮・ゼンザイを作る。オカ（陸）では一通り神棚にもゼン（膳）を供える。トシコシダナ以外のオカガミはこの日に下げたようだった。カイノハシラを作り、トシコシダナに供える。



ウ　タ　セ

〔七草雑炊〕　ナナクサゾウスイは餅・ニンジン・大根・ネブカ・タマネギ・ゴボウ・ホウレンソウ・さといも・セリなど主として正月の残りものを入れて炊く。中に入れるものは七種類とは決まっておらずそれ以上になることが多い。つくる時の唱え詞はなかった。身体の中にある沢山の毒を退治することを願う意味の言葉を胸の中で唱えた。

節分　鬼はソト、福はウチといって豆まきをした。ヨメがテヌグイをかぶり、白タビをはいてカスリの着物にタスキがけという姿で豆をまいた。

この日は餅米をゴハンに炊いてボタモチを作る。ねばっこいものを食べると思わぬ事故で海に落ちこむことがあっても急には落ちない。ねばって船にとりつく、命り大事にならずに済むといわれた。

正月十日　十日エビスでムラの広場の端にあるエビス様と氏神様の横にある金比羅様を祭る。オジメを張って供えものをし、カグラを雇い舞ってもらう。正月十日と十月十日に行なう。十月十日は臼杵の市場からブキンをもらい（大低酒を寄附してもらう）めいめいサカナを持ち寄って夕方から浜で宴会をした。市場とのサンニョウは漁のあったたびに行なう。取引する市場は臼杵がオモであるが、一カ所だけでは安い時があるので津久見・別府などの市場にも売った。

正月十一日　十一日ショウガツといい、カイノハシラとゼンザイを作り、トシコシダナに供える。神棚にもオシキゼンを供える。

三、小正月の行事

正月十五日　十五日ショウガツ。一応この日まで形式をする。カイ

う。

二十五日から始まる祭りにそなえるため。氏神様は隣りの大浜部落との間にある山の麓に位置している。

二十四日　祭礼の飾りつけをする。幟を立てオジメを張る。オジメはムラで作り、オジメゴヘイは神官が作る。神官はイチハマ（臼杵市大字市浜）の天満宮からやって来る。オジメはワラ七本・五本・三本でシリボ（尻尾）を出し、左ナワにない、さらに七本・五本・三本をつぎたしていく。鳥居三基、本殿、拝殿、オタビショなどに張る。

供物　米・塩・鯛（鯛が入手出来ない場合はアカモン＝赤物＝カナガシラ・ホウボウなど）・果物・紅白のオスワリ（オカガミ）を神前に供える。

オスワリは餅米三升で二段のものをヒトスワリ作る。オスワリは祭りが終ってからカキモチの形に切り、紅白組合わせてムラ中の家に配る。その時お宮のゴマフダ（護摩札）を一緒に渡す。

二十五日、二十六日　ムラの氏神（天満宮）の祭りを行なう。

祭礼の名称　ウジガミサマといっている。

氏神様の祭典にはヨソ（他所）に出ている者も、正月に帰省しなかった者も帰って賑やかに祝う。この祭典の時、昔は、縁談が決まることが多かったのでエンムスビともいわれている。

祭典の運営　祭りの運営は津留区長、宮の総代、世話役などが祭典役員となって行なう。役員は男二十人、女十人である。

二十五日にはお宮から神輿が出る。フキノキ二十本を持ってまわり道をして海岸を通り、ムラの広場に着く。広場にはガクヤを設けて神輿を安置する。二十五日の夜は役員が二班に分かれ、一番手が午後七

家庭のエビス様

ノハシラ、ゼンザイを作り、トシコシダナに供える。神棚にもゼンを上げる。大きなオカガミやトシコシダナの築餅をこの日にさげて焼き皆で食べる。これを食べると体内のアクブツ（悪い物）がなくなるといわれている。

正月十八日　九六位山三光院の観音様に三里の道を歩いて参る。

正月二十日　ハツカショウガツといい。この日で正月が終わる。特に定まった形式はしないが、気持の上で正月の区切をつける。雑煮、ゼンザイをこしらえて食べる。

普通の月の二十日はハツルハツカといい、仕事に出る予定があっても出ないで家にとどまるように言うけれども、正月二十日は特にいっていない。女だけの正月をこの日に行なうような風習はなかった。

二十三日　ムラの若が集まって、氏神様（天満宮）の大掃除を行な

メジオ

がはれ上ったり、木を植えても育たない。育っても今度は植えた者の足腰が立たなくなるので切り倒さなければならないと言い伝えられている。

二十五日は午前十時から午後八時ごろ迄神楽を舞い、そのあとアグカグラをする。これは個人で依頼する神楽でジャキリ（蛇切り）、カタナカグラが多い。現在は安いマクで五百円、高いものは二千円程度の礼を包む。二十六日は夜十時ごろ迄行ない、二日間で計三十三幕行なう。二十七日はムラマワリのヤキトウ（家祈禱）、マヨケをする。約百八十軒のうち八十軒くらいが依頼するので、神楽師が東西二手に分かれ、一軒につき約十分程舞う。これには百円くらいのお礼をする

宮ズモウ　広場ではミヤズモウも開催された。昔はムラにマワシを持っている者が三十人くらいいて日頃から鍛えていた。ヨソの港などで貨物を待つ間、暇があればスモウの練習をやった。

ミヤズモウにはヨソから参加者も多く盛大だった。

オカグラやミヤズモウが行なわれている最中にワケーシュは見物している仲間にゴミやクズを浴びせかけたり、草の下に隠した縄で足を引っかけ引きずったりして大騒ぎをし、楽しんだ。

祭りの食物　家では魚類・カマボコ・ヨセテン・ツキアゲ・野菜類などでゴチソウを作り、大きな平皿に盛って訪問客に馳走した。

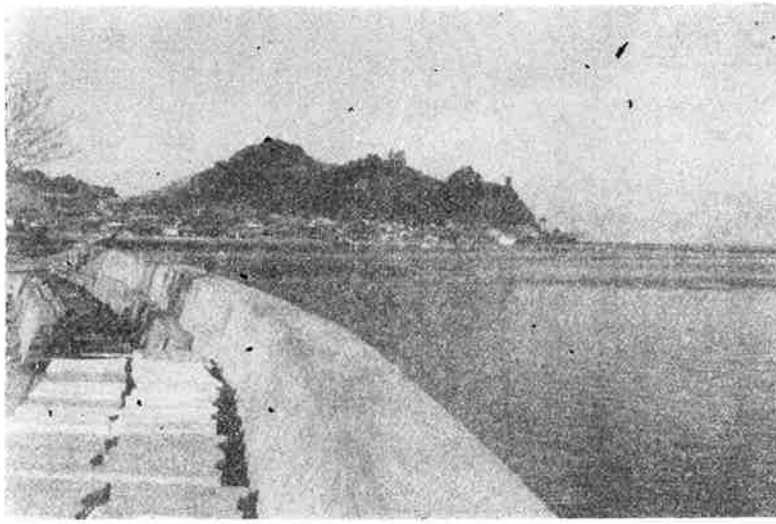
ムラの決算　祭りが終って二、三日のうちにムラの一年の総決算を行なう。収入、支出を報告し、本年の予算を立てる。この時総代、班長など、コヤクを選び、新年度の運営が開始される。（臼杵高校教官）

時から午前零時まで、二番手が午前零時より朝六時までオコモリをする。

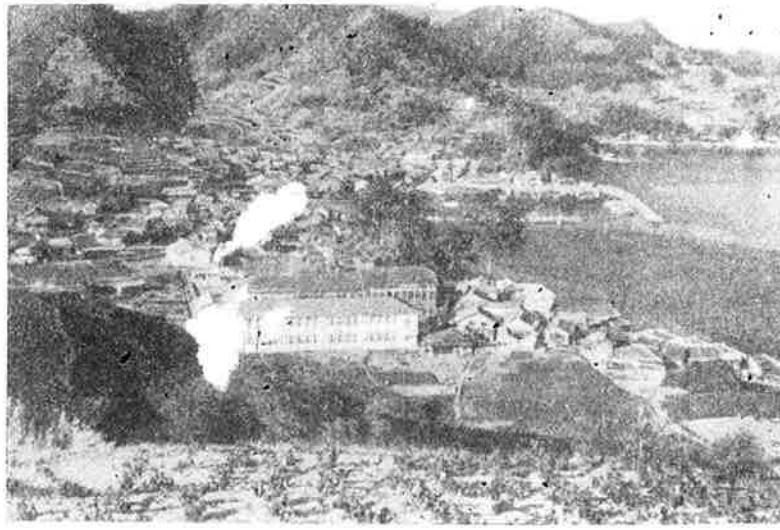
神輿は二十六日に神社へ帰る。

神楽　神楽師十四、五人を雇い岩戸神楽を舞ってもらう。できるだけ天ノ岩戸に近い所から雇う方がよいといわれた。かっては坂ノ市の奥、末広、野津、三重などから雇ったが、今は佐伯の重岡（南海部郡宇目町）から来てもらっている。以前湯ダチ神楽をやったら、その年流行病がはやったので一回でやめたことがあり、毎年岩戸神楽を行なう。

神楽は氏神様の近くにあるムラの広場で行なう。広場はムラの共有地で神聖な場所とされている。昔、大友氏の頃（不確実であるが）、首をイケ（埋め）こんだ場所といわれている。従って放尿すると性器



津　　留



大　　浜